

119. 古代の近江型 土師器甕と二つの特徴

はじめに

土師器は須恵器とともに使用された古代の日常雑器である。この土器は供膳用や煮沸用として、ときには貯蔵用の器種を含めてごく一般的に使用され、各種の遺跡から普遍的に出土する。この土師器の研究は、古墳時代前期のものでは著しい進展がみられるが、6世紀以降のものでは生産窯址が知られる須恵器ほどには、細かな地域差などが研究されないままに残されている。しかしもっともありふれて出土する土器だけに、各地の地域差が明らかになれば、地域を越えて出土する場合には土器が移動したことになるので、それによって古代の土器の移動や流通の一側面をさぐる重要な手がかりになると考えられる。

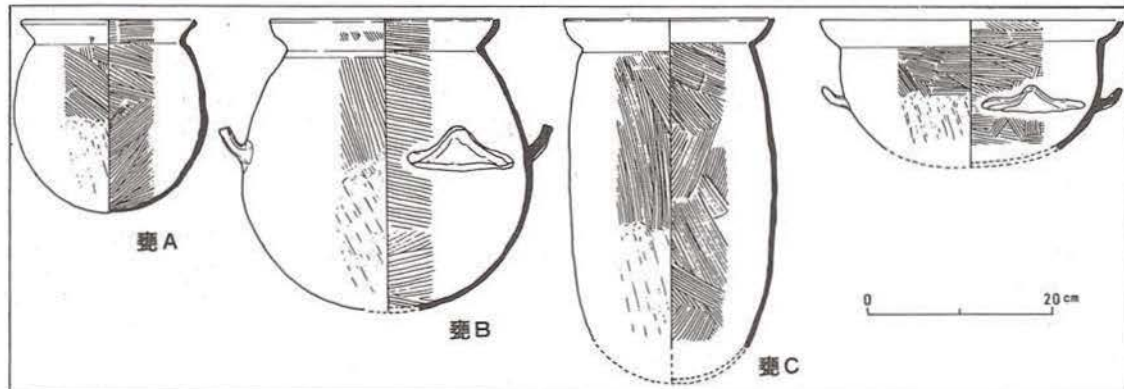
このようなことから、かつて近畿地方の大和、河内、和泉、摂津、山城、近江、伊賀・伊勢の土師器の甕・鍋に注目し、その移動の実態を一部さぐってみたことがある(1)。もとより対象とした遺跡の土器を充分検討できないまま資料化したものも少なくなかったので、不充分さを避けたい点があった。したがって、各地域の煮沸形態の土器に対する時期的な変化の把握、すなわち細部の特徴による編年作業を早急にすすめ、移動した土器のより細かくで確かな時期の把握が必要な課題の一つとなる。もう一つは、古代の各国ごとにみた土師器の形態、製作技法の普遍性に加えて、さらに各

地域での固有の技術的な差異を明確にすることができれば、土器の生産地と移動の関係をより詳細に検討できることになる。ここでは、直接後者にかかわりをもつものとはいえないが、そうした意図を含めながら古代の近江型土師器甕にみる二つの特徴についてとりあげることにしたい。

1. 近江型甕の特徴

近江の古代遺跡から出土する土師器甕は、球形の体部に短かく口縁部をつけたもの(甕A)と同形態の体部中央に一對の把手をつけたもの(甕B)、そして長胴形で短かく口縁部をつけたもの(甕C)の三つの形態がある。これらの甕では、甕Aの小形のものに限って口縁部がほぼまっすぐ外反するが、ほかは口縁部がやや内弯し、内傾する口縁端部をもつ点に、大和や河内あるいは山城など他地域のものとは異なる大きな特徴がある。その製作技法は、外面は刷毛目を施したあと、体部下半をたてにへラケズリする。内面は体部に刷毛目をつけ、口縁部にも刷毛目をつけたものとヨコナデを施しただけのものがある。長胴の甕Cは高さ40cm大におよび、器高が高いものが一般的である。なお、煮沸形態にはこれらの甕のほかに、半球状の浅い体部に短かく口縁部をつけた鍋も少なからず用いられているが、この鍋の口縁部の形態や体部の調整技法も甕の場合とはほぼ共通する。

以上のような近江型の土師器甕は、1970年までは大津市中保町遺跡(2)や甲西町狐栗古墳群(3)などでわずかに散見するだけで、まとまった資料を欠いていた。しかし1971~1972年に行なわれた湖西線関係遺跡の発掘



第1図 近江型の甕・鍋

調査で、滋賀里地区のⅣB・ⅤA・ⅤB遺構群から多くの資料が出土したことによって、その内容が具体的に知りうるようになり、近江型甕の認識が進展した(4)。その後、現在までに湖東地域の草津市下寺観音堂遺跡(5)、野洲町下々塚遺跡(6)、湖西地域の新旭町美園遺跡(7)、今津町弘川遺跡(8)、湖北地域の長浜市宮司遺跡(9)、高月町井口遺跡(10)などからかなりのまとまった資料が出土している。この間に、宮司遺跡の発掘調査報告書では、「近江型長甕」が竪穴住居に設置されたカマドと密接なつながりをもって使用されたことなどが検討されている。

2. 口縁部にヘラ記号をつけた土師器甕

近江型の土師器甕は、前述したような形態と製作技法の共通性をもって近江一円に分布する。現状では6世紀後半に成立し、少なくとも8世紀まで製作されている。このようになかなか長期にわたって製作されていることからすると、当然のことながら形態、製作技法ともに時期的な細かな差異を含んでいるものとみられる。しかし今のところなお編年できるところまで至っていないので、その作業が望まれる。さらにその性格が明らかにされていないものの一つに、口縁部にヘラで記号状にキズをつけた甕が散見することである。

この口縁部のいわゆるヘラ記号は、湖西線関係遺跡の出土品で初めて注意されたものである(11)。この調査報告書では、甕A・甕Bに3個、甕Cに2個のヘラ記号をつけた土器が図示されている。ヘラ記号は、// /// × 卍などがあり、いずれもきまって口縁部内面につけられている。これらの土師器甕は、ⅣB・ⅤA・ⅤB遺構群から出土しており、6世紀後半の時代の土器と相伴している。

その後、口縁部にヘラ記号をつけた土師器甕は、近江では今津町弘川遺跡、大津市大伴遺跡(12)、穴太遺跡(13)、新旭町正伝寺南遺跡(14)、高月町井口遺跡などから出土しており、6世紀後半から7世紀にかけてみられることが知られてきている。そして6世紀後半から7世紀前半に、とくに顕著にみられるようである。しかし8世紀までそのまま続いているかは明らかになっていない。

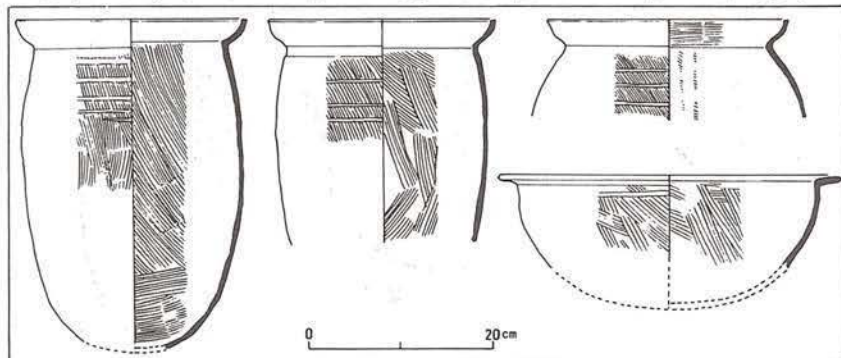
口縁部にヘラ記号をつけた近江型甕は、京都市中臣遺跡(15)、旭山古墳群(16)、常盤東ノ町古墳群(17)など、近江以外の地域でも出土している。中臣遺跡のものは口縁部内面に×印をつけた甕Aで、6世紀末から7世紀初頭の8号竪穴住居に先行

する土壙5から出土したものである。旭山古墳群では、E9号墳から口縁部に1本線をつけた7世紀前半の甕Cの口縁部片が出土している。また常盤東ノ町古墳群では、2号墳から小形甕Aに×印をつけた7世紀前半のものが知られる。これらはいずれも形態、製作技法とも近江型甕とみてよい条件を備えている。山城にはこの地域固有の甕A・甕B・甕Cの形態が存在することからみても、これらは近江から搬出された甕とみてまちがいないものである。

ではこれらの近江型土師器甕が、近江のどの地域から搬出されたものか、考古学的方法によって知りえないであろうか。それは、このヘラ記号をつけた甕が近江でどのような広がりをもつかを明らかにすることによって、その対象地域をせまめることができるのではなかろうか。土器は近江の国でも、一つの製作地からかなりの遠距離まで移動して消費されることも想定される。したがって、ヘラ記号の検討には、記号をつけた甕がたんに出土するか否かにとどまらず、その地域の製作技法の一つとして位置づけうるかをさぐる必要がある。これまで散見する資料からは、湖西地域から湖東南部にかけて顕著にみられるようである。しかし湖北地域でも高月町井口遺跡から出土しているので、その出土状況を地域ごとに比較検討することが必要な作業となるであろう。このヘラ記号をつけた甕は、大和、河内、山城、摂津などの隣接地域や周辺地域ではみられない特徴である。これは焼成前につけられているので当然のことながら須恵器のヘラ記号の場合と同様に、土器生産のありかたと密接にかかわったことが想定される。そのヘラ記号をつけた意図も興味を引くことであるが、近江型甕の移動・流通をさぐる素材としても重要視されるものである。

3. 体部に刷毛目擦り消し線をもつ甕

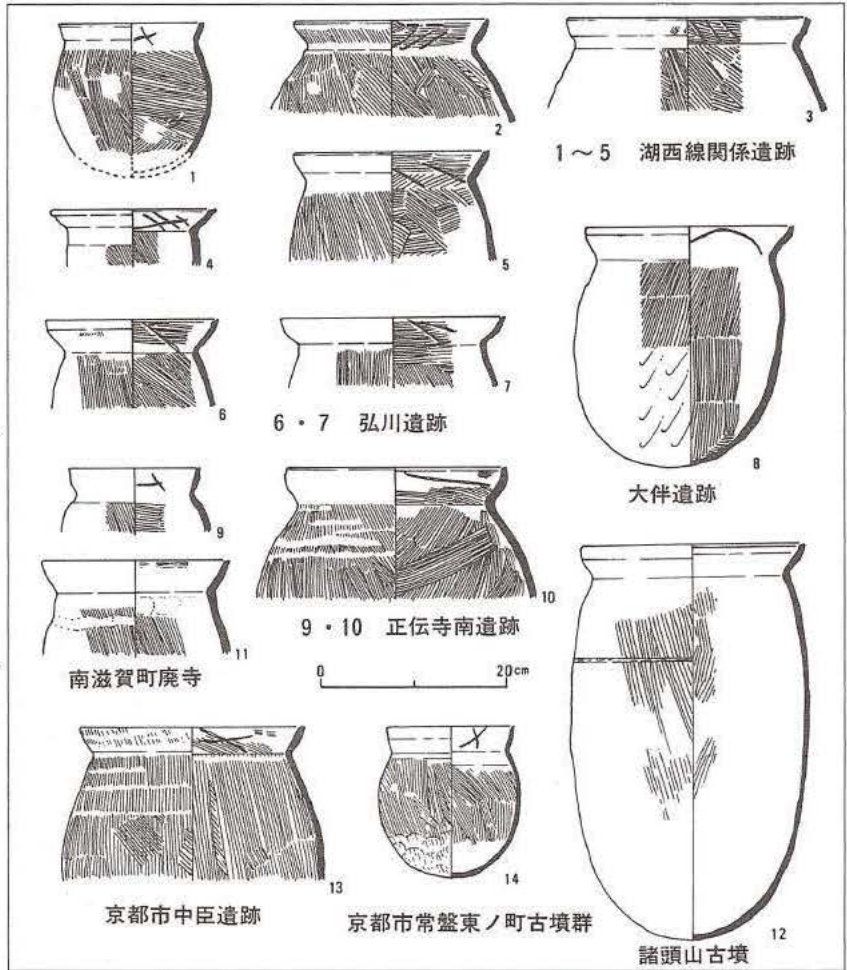
近江から搬出された土師器甕・鍋は、畿内では20数個所の遺跡からその出土例が報告されている。これらは、いずれも在地の煮沸形態の甕・鍋に混ざってごく限られた数のものが出土している。その点で特異なの



第2図 平城宮S D 1900溝出土の甕・鍋

は大和の平城宮 S D1900溝の出土品である(18)。S D1900溝は平城宮の造営前にあった下ツ道の側溝で、平城宮の朱雀門が造営されたときに埋められたと想定されている。この溝では都合183個体の土師器が出土しているが、形態や製作技法、胎土、色調などの差異によって二つの土器群に区別されている。第1群は杯、碗、皿、高杯、鉢、壺のほか甗、甗Cからなる43個体で、第2群は甗A、甗B、甗C、甗、鉢、碗など96個体がある。前者の第1群の煮沸形態は、甗1個と甗1個のみで、これらは大和型の特徴をもっている。第2群の甗、鍋、鉢はいずれも外面の体部下半をヘラケズリした製作技法がみられ、形態の特徴からみても近江型とみなされるものである。この第1群と第2群の土器は、胎土に対する蛍光X線分析による微量分析でも差異がみいだされ、その結果として産地を異にした製品とみなしうることが明らかにされている。『平城宮発掘調査報告IX』では、これらの近江型甗や鍋は、下ツ道付近にあった農業集落によって使用された場合と、S D1900溝が平城宮造営時に埋められていることから、都城の造営にともなってもたらされた土器の二つの場合が想定されている。

前者の考えは、「五十戸家」「五十家」などの墨書した須恵器が相伴していることがその考えのよりどころとなっている。しかし、大和北部の遺跡では、在地の煮沸形態もしくは山城型のものでその大部分を占めているのに対して、これらの煮沸形態がごく少量しか使用されていないのは特異である。律令制下の土器の移動には種々の場合が想定されるので、興味深い例である。しかし、いまここでとりあげるのは、近江型の甗や鍋がどのような理由によって多量に搬出され、大和で使用されて廃棄されたかということではない。それは、このS D1900溝から出土した近江型の甗・鍋にみる特異な製作手法とも呼ぶべきものについてである。



第3図

ヘラ記号・刷毛目擦り消し線をもつ甗

S D1900の近江型の甗・鍋は、外面に刷毛目をつけ体部下半をヘラケズリする。これは近江でみるものと共通する。しかしこの体部外面に施された刷毛目には、指によって1cm幅ほどに線状に擦り消された痕跡をとどめたものがみられることが注意される(第2図)。この体部外面の刷毛目の擦り消し線は、ラセン状に数条めぐらされており、多いものでは5条が平行線を描くようにつけられている。そしてこの刷毛目を擦り消した線は、甗A・甗B・甗C・鍋のいずれの器種にも施されている。

このような、刷毛目を一部分だけ擦り消した技法は、これまでのところ畿内の甗・鍋には知られないものなので、近江型の甗・鍋に限ってみられる特徴とみなしうる可能性が高い。しかし、この刷毛目を線状に擦り消す技法は、これまでの近江型の甗・鍋の報告では、ヘラ記号ほどにはよく認識されている技法とはいえない。それは、刷毛目の一部をせまい幅で擦り消しているため、破片では判別しにくいこともあり、見落され

ている場合も少なくないであろう。

いま、これまでの調査報告書に掲載されている図にその例を求めると、大津市南滋賀町廃寺⁽¹⁹⁾、長浜市諸頭山古墳群⁽²⁰⁾、新旭町正伝寺南遺跡の甕に散見するだけである。南滋賀町廃寺の甕は、甕Aの体部上半に刷毛目を消すように1条の線がつけられているもので、指頭圧痕の痕跡もめぐっている。その時期は7世紀代のものとみられる。諸頭山古墳群は、2号墳から出土した高さ40cm大の甕Cの体部上半に一条の擦り消し線がつけられており、これは6世紀末の時期が想定されている。また正伝寺南遺跡のものは、甕Aの体部上半に刷毛目が消えた部分が4条みられるものである。この甕は、口縁部内面に1本線のヘラ記号もつけられている。

さらに、近江以外の地から出土している近江型甕・鍋に求めると、京都市中臣遺跡で体部上半に3条の擦り消し線をつけ、口縁部内面に×印のヘラ記号をつけた甕Aがみられる。

以上のような調査報告の図が、刷毛目を線状に擦り消したものとみなしうるとすると、現状で知られるわずかの資料からでも、この技法が6世紀末から8世紀初頭まで確認しうることになる。平城宮S D1900溝では、76個体の近江型の甕・鍋が出土しているが、これらのうち何個体にこの擦り消し線がつけられているかは記されていないので、その比率は明らかでない。しかし、甕A・甕B・甕C・鍋と煮沸形態の器種の全てに及んでいることからみると、たまたま製作工人の手が仕上げ段階に刷毛目を消した、あるいは移動したといった性格のものではないであろう。時期を異にして存在することからすれば、煮沸形態を製作する手法の一つとして伝習されていたものと推測される。とすると、各時期とも近江で一般的にみられるのか、あるいは近江の特定地域の手法としてみられるかが問題となる。もし特定地域に限って、あるいはとくにこの擦り消し線をつけることが顕著な地域があるとすれば、8世紀初頭では平城宮S D1900溝の近江型甕・鍋を搬出した候補地として重視されよう。

現状では、近江での実態の把握が何よりも先行するが、この技法を顕著に採用した地域は、古代の近江を湖西、湖南、湖東、湖北に区分する程度には限定できるのではないと思われる。なお、このような刷毛目を一部擦り消して線状を描く技法が、どのようにして近江で採用されたのか、あるいはこの技法のもつ技術的な系譜についても考えるべきことが少なくない。しかし、これらの諸点も近江での資料の増加をまち、確かな材料によって考えるべきものと思われる。

(小笠原好彦)

注

- (1) 小笠原好彦「近畿地方の七・八世紀の土師器とその流通」『考古学研究』106号 1980年9月
- (2) 西田 弘「大津市中保町遺跡」『滋賀県文化財研究所月報』1968年9月
- (3) 滋賀県教育委員会「甲賀郡甲西町狐栗古墳群調査概要」『滋賀県文化財調査概要』第6集 1968年3月
- (4) 湖西線関係遺跡発掘調査団『湖西線関係遺跡調査報告書』1973年3月
- (5) 滋賀県教育委員会『滋賀県文化財調査年報 昭和51年度』1978年3月
- (6) 野洲町教育委員会・花園大学考古学研究室「下々塚遺跡発掘調査報告書」『野洲町文化財資料集1981-1』1981年8月
- (7) 滋賀県教育委員会『美園遺跡発掘調査報告』1975年8月
- (8) 滋賀県教育委員会『滋賀県高島郡今津町弘川遺跡発掘調査報告書—古代郷倉跡—』1979年3月
滋賀県教育委員会『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書VIII-3』1981年3月
- (9) 長浜市教育委員会『宮司遺跡・十里町遺跡調査報告書』1977年3月
- (10) 滋賀県教育委員会『国道365号線バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書—高月町井口遺跡—』1981年3月
- (11) ヘラ記号が器形の大小を問わず、口縁部の内面にみられること、×印など5種類が認められることが記されている。また7世紀後半のVD区出土の畿内風の甕には、ヘラ記号は認められないことが触れられている。
- (12) 滋賀県教育委員会『大伴遺跡発掘調査報告』1983年3月
- (13) 西大津バイパス建設に伴う下阪本1丁目の穴太遺跡の第2次調査で、ヘラ記号をつけた甕が出土している。林 博通氏の教示による。
- (14) 滋賀県教育委員会『新庄城遺跡・正伝寺南遺跡・針江中遺跡・針江北遺跡発掘調査概要—高島郡新旭町所在—』1983年3月
- (15) 京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財研究所報告1977-1』1977年8月
- (16) 京都市埋蔵文化財研究所「旭山古墳群発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財研究所調査報告第5冊』1981年3月
- (17) 京都市埋蔵文化財研究所「常盤東ノ町古墳群」『京都市埋蔵文化財研究所調査報告-1』1977年12月
- (18) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告IX』1978年3月
- (19) 滋賀県教育委員会『昭和51年度滋賀県文化財調査年報』1978年3月
- (20) 滋賀県教育委員会『北陸自動車道関係遺跡発掘調査報告書I』1974年3月